岡田全弘さん

昨日紹介したい東海ジャーナリスト臨時特別号「沖野晧一さん追悼」で、正直驚いたことがある。「沖野さんへの惜別の言葉」追加分として挟み込まれていた、岡田ゆりこさんの言葉だ。

岡田さんは元 CBC アナウンサーで、現在は石川県七尾市在住である。沖野さんがお亡くなりになったという知らせに、「ショックでした。悲しみと同時に、やはり 3 年前の苦渋の決断を思い出しました。夫の場合は二度目の脳梗塞で医師から告げられたのは、もはや手術のすべもない、延命治療の選択はご家族で判断してくださいという言葉でした。……夫は、私たちに託した意志通り、延命措置を受けることなく、自らの生命力で呼吸を続け、翌朝永遠の眠りにつきました。」

あの岡田全弘さんが亡くなったことを初めて知った。まったく信じられない気持ちで、ショックを受けた。全弘さん、「ゼンコ―さん」呼ばれて、多くの人に親しまれていた。全弘さんは自治体労働運動の第一線で活躍され、東海自治体問題研究所で一緒に活動したこともある。いわゆる組合活動家らしくなく、じつに幅広い視野と関心をもつ人だった。存在感と野性味、人間味のある人だった。私にも「先生、先生」とよく声をかけてくれた。

全弘さんは、こよなくイタリアを愛し、出版された本を頂戴したこともある。全弘さんらしい強い思いがあり、名古屋から石川県の能登島に移った。そのときは、残念な思いがしたものだ。能登島の民宿で漁師をされていた頃、お誘いを受けたが、残念ながら行けなかった。てっきり石川県や能登島の住民運動に関わり、彼らしく「まちづくり」に奮闘されていると思っていた。確か「七尾市総合計画審議会」委員として、名を連ねていたと思う。

全弘さんが亡くなったのは、2014 年 12 月という。私が退職した年だ。退職後ということもあり、交流・情報不足を恥じる。8 月からレポートを毎朝書くようになったが、8 月 30 日と 9 月 2 日「桐生悠々物語―ペンは死なず」を書いた。この劇の主役桐生悠々の妻・寿々を華麗に演じたのが岡田ゆり子さんだ。この私も驚くことに、東京朝日新聞の松田編集長役を演じた。なんと 10 回も台詞があった。いまから 30 年ほど前になる。全弘さんのことも知らずに、このレポートを送ったと記憶している。

惜別の言葉のなかで、岡田さんは「親を失うと過去を、子ども失うと未来を、連れ合いを失うと現在を失う」と書いている。「現在を失う」という辛い日々だと察するが、寿々さんのように、能登島の地で元気に生き抜いてほしいと願うばかりだ。

（2017 年 6 月 6 日）